



東地中海地域ニュース

イスラエル：イラン攻撃の可能性

(7月2日付現地各紙)

1. ハアレツ紙（アモス・ハレル記者）

(1) 知られている限り、これまで何らの意思決定もなされていないが、方向性は過去数年間よりも遥かに明確である。すなわちオルメルト首相が6月にホワイトハウスでブッシュ大統領と会談後、「日を追うごとに我々はイランの核問題の解決に近づいている」と語ったことは示唆に富む。軍事オプションに関する青信号に関してヒントともとれる。

(2) 空軍の演習は、この半年で2回目であり、これはそのような攻撃に備えて IDF の準備体制を向上させる試みとみられるべきである。また昨年シリアでの攻撃から、オルメルト首相は、自ら必要不可欠とみなした目標に対して、大きな個人的リスクを負うことも辞さないように思われる。

2. イエディオット・アハロノット紙（アレックス・フィッシュマン記者）

(1) 米国政府は、誰かを脅すために我々を利用している。それが、ヨーロッパか、イランか、国連かは問題ではない。重要なことは、イランに対する戦闘の危機の雰囲気、つまり世界全体に破壊的な結果をもたらすことになる危機の雰囲気をつくり出すことだ。イランがひるまなければどうなるか考えた方がいい。

3. マアリブ紙

イスラエルは本当にイラン攻撃の準備ができているのか。ある安全保障筋高官は、効果的な攻撃ができる戦略的な能力はないと語った。一方で複数の米国防省筋は、米国メディアでイスラエルが今年末までにイランの核施設を攻撃するだろうと宣言した。